
拾い者しました

音-OTO-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拾い者しました

【Nコード】

N7411Y

【作者名】

音・OTO・

【あらすじ】

ある雨の日、いつものように残業を終えて帰宅中の水城^{みづき}あおいはダルマのようにまるまっている男を助けた

第1話 ダルマ男

第1話 ダルマ男

今日もいつものように残業を終えた 水城^{みずき} あおいは

秋の冷たい大雨が降りしきる中

レインコートの前をしっかりと閉めて傘といつものように夕飯の入ったコンビニ袋、

そして仕事用の四角いかばんを胸に抱え急ぎ足で自宅のマンションを目指していた

「今日も帰るのはてっぺんぎりぎりだよ…。さすがにこんな天気の中ですることじゃないわね」

2

誰に言うわけではないが強い雨風に傘を飛ばされないように握り締め文句のようにつぶやいた

自宅のマンションに向かうためには目の前の長い階段を上らないといけない

高台にあるこのマンションを気に入って購入したが
雨や雪の日にはなかなかネックに感じる

あおいはため息をつき気合を入れて階段を登った

「あれ？」

マンションの入り口は目と鼻の先、という距離だったがあおいは立

ち止まった

入り口の横の植木のところに若い男がダルマの様にうずくまっているのが見える

「あれ、人だよな？あんなずぶぬれで・・・おかしい人？」

(うーん・・・これは絶対スルー決定だわ)

明らかに不審者と思しき人物がそこら辺にいたら皆一様に関わらないようにすると思う

あおいもそれに習い、この不審者らしき男の前を通り過ぎようとした・・・その時
うずくまっていた男が横向きに倒れた

「え?!」

さすがにぎよつとしたあおいは恐る恐るその人物に近づいた

「ちよ・・・ちよつと?!大丈夫???」

ずぶぬれの相手に触るのとはばかり手を出せないでいたが
いくら声をかけても返事がないので肩を叩いてみた

だが、結果は同じく返事はなかった

どうやら気絶しているらしい

さすがにこのまま捨てておくわけにも行かない

この冷たい大雨の中にいたら明らかにまずいだろう

救急車を呼ぶにもとにかく屋根のあるところまで行かなければ・・・

こんな時間じゃさすがにマンションの昼勤の管理人もいない

周りを見渡しても人通りもなく

あおいは仕方なくマンションの入り口に自分の持っている荷物を置

きに行き

ぬれるのを覚悟で傘を置いたまま男の元へ戻った

どうにか引きずってマンションの入り口まで連れてきたが男は意識がないままだった

(とにかく電話。救急車呼ばなきゃ・・・)

救急車に電話しようとポケットに入れている携帯を出したが電源が入らない

「うそ!?!」

どうやらこの雨でショートしたらしい

「ちょっとー!?!?!携帯のバックアップは自宅のＣＰにあるから
どうにかなるけど・・・」

この男、どうしろって言うのよ!?!?!」

苛立ち気味に男をにらんだあおいは男が何か言っているらしいのに
気づいた

「ちょっと!大丈夫ですか??」

男は目は開けていなかったが意識が戻ったのか何かをつぶやいてい
るようだ

あおいは男の声を聞こうと屈みこんだ

男はとても小さな声で「寒い・・・寒い・・・」と繰り返して
いるようだ

よく見ると男の身体もガタガタ震えていた

あおいはしばらく考えたが意を決したように立ち上がり男を自分の

自宅へと連れ帰ったのだった

続く

第2話「ハウスキーパー？」

ダルマ男をどうにか叱咤し自宅へ連れ帰ったあおいは
だいぶ躊躇ったが男の服を”えいや！”と脱がせ身体を拭いた
だいぶ小さいが仕方がない・・・と

自分のジム用のジャージを男に着せ客間に敷いた布団に突っ込んだ

あおいは一仕事終わったかのようにぐったりしたが

ダルマ男が寝ているのを確認し客間を出た

男が着ていた服を洗濯機投げ入れ

自分は手早く風呂に入りさっぱりし遅い夕食を食べた

「なんで私はあんなだるま男の連れ帰ったのだろうか・・・」

ソファで温かなコーヒーを飲みながら

何度目かわからない眩きをため息と一緒にはいた

携帯は壊れるし、ろくなもんじゃない

「あの・・・あの・・・」

あおいは肩を叩かれて目を覚まし、びっくりして飛び起きた

びっくりしすぎて心臓がドッドドッド・・・と走ってる

目の前に昨日のダルマ男があおいのジャージをつんつるてんに着て
正座している

どうやら昨日は夕食を食べた後ソファで転寝のつもりが寝入ってしまっ
たらしい

外は昨日と打って変わってよい天気らしい。だいぶ明るくなっていた

時計を見たら5時半を少し回ったところだった

「お・・・起きたの？」

あおいは驚き覚めやらぬままソファの隅に逃げるように移動しながら聞いた

「はい」

ダルマ男はそんなあおいの行動を気にも留めずにつなずいた

「た・・・体調はいいの？昨日は震えていたみたいだけど」

「震えてましたか？いえ。大丈夫です。一晩寝たら元気になりました」

「そう。ならよかったわね」

つんつるてんなジャージ姿で正座をしているダルマ男はいきなりガバツと土下座をした

「ホント昨日はありがとうございます。あのままあそこにいたら絶対死んでました」

「お、お礼はいいわ。元気になったなら・・・」

あおいは引きつった顔で手をぶんぶん振った。そして、ひとつ深呼吸をすると男を見据えた

「起きたんなら早く出て行ってくれる？」

フローリングの床に頭をつけている男にソファに座ったままあおい冷たく言った

丁寧にお礼を言っても不審者には変わらない

元気になったのなら、なおさら早く出て行って欲しい

「失礼を承知の上でお願いがあります!!」

男は土下座の姿のまま顔を上げず叫ぶように言う

「俺をここに置いてください!!!」

「はあああああ?!」

あおいは目をむいた

「な!!なに言ってるの?! 訳わかんない事言ってるので出ていってよ!!!」

あおいはソファの上に立ち上がり男に叫んだ

(ああ。なんでほんとに家に連れて帰ってきたんだろう・・・)

あおいは頭がクラツとした。

目の前のわけのわからないだるま男を引きつった顔で見つめる

「助けていただいたのも何かの縁。どうかお願いします!!!」

ダルマ男は顔をこちらに向け、まるで迫ってきてそうな勢いで言う
あおいはあわててソファの端に飛びのいた

「勝手なこと言わないでよ！出て行って！！！」

あおいは得体の知れないのを見るような目で男に言った

「なら！なら住み込みのハウスキーパーとして雇ってもらえませんか？」

「は??？」

あおいは一瞬意味がわからず固まった
だるま男はやや引きつった面持ちで部屋をぐるりと見渡した

「失礼ですが、ここの部屋・・・類稀に見るゴミの樹海ですよ・・・
ね・・・」

「・・・」

そうなのだ

3LDKある間取りの部屋だが、あまり使わない客間を除いて
この家は足の踏み場もない。

と言うより何か物の上を歩かないと歩けないほどにとてつもなく汚い
そう、ごみの山である

今もあおいはソファに好きこのんで座ったり立ったりしていたので
はなく

このソファしか座ったり立ったりするスペースがない
ダルマ男も荷物やゴミを寄せてスペースを作って座っているのだ
仕事にかまけていたせいか

「ごみ捨ての日にゴミを捨てれず”まあ、いいや”と、そのまま溜まり
洗濯物は洗濯乾燥機に突っ込んだまま乾いたものを着て

クリーニングから返ってきた服はそのままそこら辺においてある状態なのだ

「な・・・！な・・・！いいでしょ！別に！！関係ないでしょ？大きなお世話よ！！」

あおいもダルマ男の表現した言葉はとても正しい表現だと思ったが他人から言われれば大いに傷つく。

「俺、こう見えても炊事含め家事全般得意なんです。どうですか？雇ってくれませんか？なんだったらお給料はいいです。雨風さえさえぎれば。どうかここに置いてください！！」

ダルマ男は再度頭を下げてきた

(なんかだんだん頭が痛くなってきた・・・)

あおいはソファにぺたんと腰を下ろした

「あなた、名前は？歳は？」

あおいは自分のおでこを押さえながら聞いた
だるま男はがばつと顔をあおいの方へ上げた

「名前は高柳^{たかやなぎ} ユウといいます。歳は25です」

(2つ年下か・・・)

「高柳くんね。高柳くんは家に帰れない理由はなに？」

ユウは身体を起こしてあおいと向き合った

「俺は都内のアパートで長いこと一人暮らししていました。ですが、1週間前、バイトから帰って見たら住んでいたアパートが俺の荷物ごと取り壊しになっていて更地になってたんです」

「・・・は？」

いや。信じられないだろう。普通ありえない。

「大家さんは？もしくは不動産屋は？」

「大家さんにも不動産屋さんにも電話はしたんです。ですが、この電話番号は使われていませんって言われて」

ユウはズンと肩を落として話している

「待ってよ。だって契約書とかあるでしょ?!そんなのありえないでしょ」

もし本当の話だとして常識で考えてもありえない。違法だ。

「その契約書も一緒に更地になってしまったので確かめようにもどうにも出来なくて・・・」

と、暗い顔をした

「あなた、親は？」

ユウは暗い顔のままた

「親はいません。幼い頃に亡くなりました」

と言った。

聞いたあおいはあせった。

なぜならあおいも両親をとつに亡くしている
聞いてはいけないことを聞いた思いになった。

「そ、そうなの。・・・聞いてごめんなさい」

あおいは申し訳なくなりあやまった

「いいえ。当然の質問だと思います」

ユウは毅然と返事をした。

あおいは、はた、と気になったことをユウに聞いた

「・・・ねえ？さつき取り壊されたの1週間前って言ったわよね？」

「はい」

ユウはきょとんとした顔で同意の返事をした

「あなたこの1週間どうしてたの？」

「ああ。この1週間は手持ちのお金でネットカフェとかに行つてど
うにか凌いでたんです。ですが、さすがに1週間点々とするには手
持ちがなく。昨日で手持ちのお金も尽きて・・・」

ユウは心底困った。という顔をした

「バイト先に家がなくなったことを話したんですが所在不明は雇えない。」

と、クビになってしまつて・・・途方にくれてとりあえずのつもりであの植木のトコで座つてたんです。

なんか考えてたら頭がぐるぐるしてきて気づいたら寝てたみたいです
雨が降つてたことも気づかなかつたです」

あはは。とユウは笑つた。

(いや、あれは気絶してたんだと思うが・・・)

あおいはふう、とため息をひとつついた。

「状況はわかつたわ。でも、『はい。では雇います』って簡単には出来ないわ」

ユウは正座のまま真剣な面持ちで聞いている

「だからこうしましょう。私はこれから仕事なの。」

だから帰つてくるまでにこの部屋をきれいにしてちょうだい」

あおいは半ばやけっぱちな気分になつた。

ユウの顔つきがみるみる変わつていく

「私が納得のいく状態ならハウスキーパーの話、考えるわ」

「はい！ありがとうございます！！頑張ります！！」

ユウ満面の笑顔であおいの両手を握り締めてブンブン振つた

ああいはびっくりして顔を赤くし、手を振り払い

「まだ雇うとは言ってないわよ！納得したらよ！したら！……！」

と叫んだのだった

続く

第3話「ありえない」

その後、あおいは会社に遅れていく旨を連絡し
昨日の壊れた携帯電話を持って携帯電話会社に来ていた

壊れた携帯を渡したら、やはり中の基盤がショートしているという
答えが返ってきた

同じ機種の本体を再度買うためには数日かかるらしい
あおいは代替機を借りるための手続きで待たされていた

(高柳はどうしているだろうか…)

あおいはふと、今朝の出かけ直前のことを思い出していた

いつまでも自分の小さいジャージを着せておくわけにもいかないので
洗濯機に彼の着ていた服が入っていてもう乾燥されて乾いているだ
ろうことを伝え替えさせた

ハウスキーパーをする。という話しになってユウはあおいに
やってはいけない事などを聞いてきた

「うちは3LDKでこのリビングダイニングとあなたが使っていた
客間、

それと私の寝室、そして書庫として使っている部屋があるわ」
「書庫？」

「ええ。趣味でいろいろ本を読むもので一部屋まるまる本棚として
使っているの」

「へえ。すごいですね」

「別にすごくないわよ。ただ増えすぎただけ」

あおいは事無げに言った

その後、基本的に自宅に財産らしきものを置かないあおいは

「寝室だけ入らなければ後はどこを掃除してもかまわないわ」

と話した

ユウはしばらく考え込んで

「……ここが寝室ですよね？」

あおいの寝室の前までスタスタ歩きドアを指差した

「そうよ？」

何をしたいのかわからなかったあおいはうなずいた

それを確認したユウは「失礼します!!!」と、あるうことがドアを開けた

「ちよつと！何を」

ぎよつとしたあおいはユウを止めようとした

が、それには及ばず寝室の中の散散な有様を目の当たりにしたユウはドアを開けた姿のまま固まった

そして、ギギギ…とひきつった顔をこちらに向け

「すみません……。掃除の時だけその不可侵条約守らなくてもいいですか??？」

と言ってきたのだった

そんな恥ずかしいこともあったがあおいは気を取り直して

ユウに掃除の費用としては多すぎる額のお金を渡した

「これで部屋をきれいにして夕食の準備をしておいてあなたの今日の食事代もこれから出してちょうだい」

受け取ったユウは神妙な顔をして

「はい！頑張ります！！」

とあおいを玄関で見送った

あおいはそんなユウを残して部屋を出たが

ユウがそのまま掃除をするとは思っていなかった

あのままお金を持ち逃げするだろうと思っていたし

してもかまわないと思っていた

そのために当座をしのげるだけの額を渡したつもりだ

別にハウスキーパーを雇う程度の事ならあおいの父が生前教えてく

れた株取引で

かなりの収入があるから可能といえば可能だ

あおいは朝からの出来事で疲れた顔をしたままため息をつき

今の考えを打ち消した

ありえない

馬鹿馬鹿しい

(家に帰って彼がいなくなっていれば万々歳だわ……)

「お待たせしました。水城様」

店員が奥から代替機を手に戻ってきた

あおいはため息をひとつ付き手続きをした

続く

第4話「呪文」

使いづらい代替機を手にあおいは会社に出勤した
あおいが務めている会社は業界の中では小さい出版会社で
この会社中途入社して2年になる
中途採用だったがそこその仕事を与えられ充実した職場環境だ
自分の席に着くと隣の席の同僚が話しかけてきた

「水城さんおはようございます」

「おはようございます」

「今日は出勤遅かったんですね」

ニコニコしながら聞いてくる女性は一昨年、大学を卒業した
あまの
天野 未央
中途入社にあおいより半年早く新卒で入社した明るく可愛らしい女
の子だ

「ええ、携帯が壊れてしまって・・・。

遅れてごめんなさいね」

「いいえ！いいんですよ！」

申し訳なく謝ると彼女は必死に両手を振って否定してきた

「水城さんがこの会社に入ってから

仕事の効率が上がったって評判なんですよ！

出す企画はどれも好評だっていうし

だから少しぐらい遅れたってみんな大目に見ますよー」

「あ、ありがとう」

「私も言われてみたいなあ、あこがれちゃうなあ」
「そんなことないわ。買い被りよ」

はあ、と吐息をもらし、しみじみと言う天野の言葉を軽い笑顔で受け流しながら

自分の席のパソコンを起動させた

(まずいわ、目立ってしまったている…
気を付けなければ…でないと、また同じことが…)

天野と話していた時の笑顔とは裏腹に恐れを感じてたあおいは
キーボードの上に置いた指がカタカタと震えるのを止められずにいた

「水城くんやつと来たかね！」

フロアが震えてるんじゃないだろうか、と思うほどの大声があおい
を呼ぶ

課長の時田だ。

あおいは心底びっくりした

おかげで震えは止まったが心臓がバクバクと踊っている

大きなファイルを手に課長がこちらへやってきた

あおいは席を立ち課長と向き合った

「なんででしょうか？」

「君の提案した企画だけどね!!」

(み、耳が痛い…)

この課長は別に怒鳴っているつもりはないのだから
いちいち声が大きく怒っているように聞こえる

聞く方はいつも身構えてしまうのだ

「あの企画をね、先方がいたく気に入ってくれてね”ぜひ進めたい”っていうんだよ！」

これからミーティングするから会議室まで来てくれ！川端、矢野も来い！！」

課長はほくほく顔でフロアの隅にパーテーションで区切られただけの会議室を指差した

川端と矢野と呼ばれた二人はあおいや天野よりずっと長くいる先輩だ二人は先にこの話を聞いていたのかファイルを手に持ち会議室へ向かおうとしていた

(たぶんメインはこの2人…)

あとは企画を出したあおいももちろん参加となる

天野は”ほらね？”と言わんばかりの顔で見ってくる

あおいは苦笑いをした

そして少し考え課長へ声をかけた

「課長！天野さんも同席してもらってもよろしいでしょうか？」

「え?!」

「私は別にかまわんよ

じゃあ、天野君も一緒に来たまえ」

課長は川端と矢野を従えさつさと会議室へ向かってしまった

天野はぎよつとし、おろおろとあおいを見上げている

あおいは天野へ体を向けた

「あの企画は川端さんと矢野さんも入ってくれるけど

私だけでは荷が重いの
できればサポートがいてくれると助かるの
天野さんの力を貸してくれない？」

天野は入ってからまだプロジェクトに本格参加はさせてもらっていない

いつもプロジェクト以外の裏方ばかりだ
ここであの企画に私の補佐として参加すれば
きっと彼女の評価をあげることも出来る
あおいはそう考えた

(それに…)

「私でよければ！」

天野は初めて裏方ではなく参加できる喜びいっぱい顔であおいに
返事をした

そんな天野にうなずきながらあおいは資料をデスクの引き出しから
出した

(目立たない…目立たない…)

そして呪文のように心の中で唱えながら天野を連れ立って会議室へ
向かったのだった

続く

第5話「哑然呆然」

会議は午前中いっぱいかった

あおいは午後の時間を天野に企画の内容説明する事に費やし

その後、滞っていた仕事を残業して片付けた

疲労感をどっと感じつつ、いつも通りにコンビニ弁当をぶら下げて自宅マンションへと向かう

自宅前に着いたのは23時を少し回った頃だった

あおいの頭の中からは高柳ユウの事などとうに消えていた

”きつと家を出てどこかに行ってしまうただろう”と決めつけていたのだ

あおいは鍵をバッグから取り出しドアの鍵穴に入れようと手を伸ばした時

”ガチャッ”

内側から鍵が外され

そしてドアが開き高柳ユウが顔を出した

「!!!」

あおいはびっくりして鍵を落としてしまった

高柳ユウはあおいが落とした鍵を拾うとあおいに差し出した

「おかえりなさい」

開いたドアノブに手をかけたままの高柳ユウはどこにあったのか赤いエプロンをつけて立っていた

あおいは鍵をユウから受け取り

いるはずもない者を見るような目でまじまじとユウを見た

「た、ただいま」

「お帰り遅かったですね、さあ、どうぞ」

ユウはドアを大きく開きあおいを中へとつながした
あおいは”あんなエプロン持っていたっけ？”と、的外れなことを
考え

そして高柳ユウの横を抜けるように玄関へと入った
そこには最近まったく見たことも無かったほどピカピカになった玄
関があった

あおいは呆然と立ち尽くした
そしてパツクリと口を開けた

(ここはどこ?!)

脱ぎ散らかした靴も汚かった三和土も捨てようと思ってそのまま重
ね置いていたゴミもない
暗かった玄関が何トーンも明るくなっている
まるで自分の家ではない

「荷物持ちましょうか？」

玄関ドアを閉じたユウが聞いてくる

あおいはスローモーションになってしまったかのようにゆっくりと
ユウへ顔を向けた

ユウはニコツと笑うと甲斐甲斐しくテキパキと
立ち尽くしているあおいのコートとコンビニ袋とバッグを受け取った
そして玄関上にかかる

これまたどこにあったのか新品のようなスリッパをあおいに勧め
部屋の中へと入っていつてしまった

あおいは他人の家に入るような気分で呆然としたままユウの後に続

くように

とてもきれいになった部屋へと上がった

あおいは廊下をキョロキョロと見渡しながらリビング・ダイニングへ入った

そして部屋の様子にたじろいだ

”この家のリビング・ダイニングはこんなにもシンプルだったか？

”と思うほどに物がなくなっている

その中でも一番の驚きは

(床が見えてる！！)

あおいは唾然と床を凝視した

玄関に置ききれずに置いてあったゴミ袋も読んでそのままの新聞もポストから出して見もせず投げ置いたDMも広告もまったくくない

どのぐらいぶりにこの部屋の床を見たのであろうか

あおいはまじまじと床を見つめてしまった

床は拭き清められているのか光っていた

そんなリビングでユウはあおいのコートをハンガーに掛けバッグをローテーブルに置き

パタパタとスリッパを鳴らしダイニングキッチンへと移動していた

「先にご飯食べますか？」

高柳ユウが聞いてくる

「え、ええ」

あおいは戸惑いながら返事をした

「すぐ出しますから座っててください」

コンロで鍋を温める音を聞きながら

あおいはリビング・ダイニングをジロジロと検分しているかのように見渡した

そしてカーテンの閉まっている窓辺まで歩きカーテンを開けた

テラスに向かう窓はいつも曇っていたのに透き通っている

(この部屋から見る夜景ってこんなにきれいだったかしら・・・?)

テラスを見渡すと使わらなからと放り投げた貰い物のアウトドア用品やパラソルはなくなっている

どこにいったのだ?と疑問に思いながらもほかの部屋も確認しようとして対面式のキッチンで動くユウを不思議な思いで見つつあおいは自分の寝室へ移動した

そしてあおいは寝室のドアを恐る恐る開けた

(す…すごい!!)

ドアを開けた先はまるでホテルのようになっていた

ピシッとベッドメイキングされたベッド

チリ埃ひとつないチェスト

クリーニングから返ってきてビニールカバーも付いたままだった服はビニールを剥がされ

そこここに無造作に投げて重なって山になっていた服も本来あるべき場所

クローゼットにきれいに収まっている

あおいは寝室を出てほかの場所も覗いた

トイレも浴室もどこもきれいだ
白ってこんな色だったのね、と思い出させるように磨かれた浴槽
カビひとつない壁と床
洗剤やタオルも整頓されている

休みの度に籠っている書庫

こちらも本棚に入れるのが面倒で床に乱雑に重ねて置いていたが
それらはどこにも見当たらない
すべて分類されて本棚に収まっている

どこの部屋も埃っばかったのに清々しい空気で満ちていた
誤魔化したところがまったくない

どこもすっかりきれいになっているのだ

あおいの心は次々と起こる驚きに対処できなくなっていた

啞然呆然としたままダイニングに戻りダイニングチェアにストンと
腰を下ろした

そして、一番の驚きの元のユウに顔を向けた

続く

第6話「葛藤とじぢやじぢや」

あおいはきれいになった家の中にももちろんとても驚いたがそれ以上にとつくにいなくなっていると思っていたユウがまだいたことに驚愕した

人間、驚きに際限はないのかもしれない

「あ、ありがとう

すごくきれいにしてくれたのね」

ユウは夕食の準備をしながらあおいへ顔をむけた

「はい、頑張りました

俺ほんと家事得意なんです」

温めた味噌汁をお椀に、鍋で炊いたらしいご飯を茶碗によそい

「えへへ」と笑いながらユウはあおいに答えた

ホント頑張った

あの床が見えないほどゴミやら新聞やら

あおいの生活が山のように置いてあったのだから

高柳ユウはあおいの前にテキパキと夕食の皿やお椀やらを用意していく

(こんな食器もってたかしら?)

あおいは手をひざの上に置いて目の前に置かれる器や料理をただ関心して見ていた

用意してくれたのは

サバの味噌煮込みとお味噌汁、ご飯、香味野菜が乗ったお豆腐とお漬物だ

ダルマのように転がっていたこの男が作ったとは到底思えない食事
あおいは上目づかいでジロジロとユウを見た
用意するユウの姿は料理に慣れた者の姿だった

「こちらが夕飯です、お口に合うといいんですが……」
「……いい、いただきます」

あおいはお箸を取り恐る恐るお味噌汁に口をつけた

(……!……美味しい)

お味噌汁を皮切りにあおいは一つ一つ味わいながら食べた
誰かの手料理なんてどれくらいぶりに食べたかわからない

そして、ふとした思いが頭をもたげたため

あまり顔を合わせたくもなく中途半端なところに視線をウロウロと
漂わせながらユウに話しかけた

「あなたは食べたの？」

聞いた後からばかばかしい質問だったと気づいて焦った

「あ……いえ、なんでもないわ。もう遅いし食べてるわね」

(今いつたい何時だと思っているのだ)

(こんな時間なのに食べてない事などないだろう)

「いえ、食べてないです」

「え?!」

ユウは当たり前のようにさらりと言った

あおいはまた驚いた

「ならここに来て食べなさいよ

あなたの作ったお料理なのだから」

あおいは自分の前の席を示しながら言った

「本当ですか?じゃあご一緒させて頂きます」

ユウはぱあっと笑顔になり嬉々として自分の分の食事もイソイソと用意して席に着いた

「頂きます」

ユウが挨拶して食事を始める

あおいはその様子を黙って見ていた

そして、もちろん会話があるわけでもないので黙々と食事を再開させた

食事をしながらあおいは考えた

(部屋は今朝話したようにきれいになっている

そして、料理も上手

美味しい、とても美味しい…)

あおいは目の前でだんだんと減っていく料理をじーっと見つめた
なくなっていくことが残念でならない

(でも男性よ？常識的に考えてありえないわ
そうよ！ありえない！！)

あおいは考えた勢いでユウにバツと顔を向け口を開こうとした
そしてピタツと止まった

(待って！！こんなきれいな部屋で過ごせるなんてどのぐらいぶり？
あのきれいになったベッドで寝たらとっても安眠出来そうよ？
書庫なんて可能ならば何日だって籠れそうだわ)

きれいになった部屋での満喫できる過ごし方をうっとりしながら頭
の中で妄想した
とても魅力的だ

(でも”あの人達”がこれを知ったら・・・)

あおいはげんなりした
せつかくしていた魅惑の妄想が一気にしぼんだ

「
か？」

ぼんやり考えていたせいか、あおいは何か話しかけられていたこと
に気が付かなかった

「あの??？」

「な、なに？」

あおいは、取り繕うように食事を再開させながら聞いた

「美味しいですか？」

ユウが真剣な顔で聞いてくる

「え、ええ、とても美味しいわ」

本当に美味しかったからあおいは素直にそう言った
さばの味噌煮込みはちゃんと味が染み込んでいるし
味噌汁も御出汁がちゃんと出ている

「それはよかった」

へにゃつとした笑みで顔を崩しながらユウは喜んでいるようだ

「・・・」

その笑みに胸の中がほんわかした気がする

釣られてあおいまで笑顔になった

だいぶひきつってはいしたが…

あおいはお茶碗とお箸を手にしたまま

また考え始めた

（ホントにこんな出来立ての温かで美味しい手料理はいつ以来だろう
”おかえりなさい”の言葉、最後に誰から言われか覚えてもいない
でもやはり無理だわ・・・）

「・・・やっぱりここには置いてもらえないですね・・・」

ユウはご飯茶碗を下ろししゅんとした

まるで捨てられている子犬のようだ

そしてそんな子犬の目でこちらを見てくる

あおいには段ボールに入った子供の柴犬がバツクに見えた

(そ、そんな目で見られたら”NO”と言えないじゃない…)

あおいの良心が痛みがした

(そ、 そうよ！今、この人を追い出したら路頭に迷うかもしれないのよ？

これは人助けになるわ)

しかし”冷静に考えろ”と言つ心の声もする

(いいえ！でも男性なのよ？

それに”あの家族”がここにやってくるかもしれない

それだけは絶対阻止しなくていけないわ

ここは心を鬼にして情に流されてはダメよ！！)

あおいはお箸の持っていた手を下す

(もし雇ったとして確かに部屋はきれいになる…

きれいになっているこの部屋はとても居心地がいい

料理もとても美味しい

揺らぐ、揺らぐが…)

しかしここで”そうよ、無理だわ。出て行って”って言うべきなのだ
あおいは決心が付いたように下した手に持っていたお箸をグッと握りしめた

そしてついに言った

「いいわ、雇います」

「ほ、本当ですか?! やったー!!」

ユウはご飯の途中だというのに立ち上がり両手を上に突出し喜んだ
あおいは自分の口から出た今の言葉に啞然とした

(わ、私、何を?!)

なんと口から出た言葉は心の声とは裏腹で”雇う”と言ったのだ

「あ……」

あおいは前言撤回するつもりで話しかけようとしたが
ほんとに嬉しそうにしているユウに何も言えなくなり
ただ、ただ、口をパクパクさせるしかなかった

少し落ち着いたユウはハツとして慌てて席に座りなおした

「食事中にすみません」

「い、いえ……」

あおいはまだ自分の言ったことに動揺していた

「実は、あなたがコンビニ袋を持って帰ってきた時に

” ああ、駄目なんだな” って思ってたんです

…だからホント嬉しいです」

ニコニコと嬉しそうに笑うユウは心底ホツとしたようだ

あおいは行動が見透かされていた事に恥ずかしさを感じた

”コホンッ”とひとつ咳払いをしてユウに向かい合った

「高柳くんだったわよね。・・・とりあえずご飯、食べてしまいま
しょう」

「はい！」

(もう腹をくくるしかない…)

ああいほごちやごちやした頭の中を落ち着かせながら
ニコニコ顔のユウと残りの夕食を食べたのであった

第7話「あたふた」

夕飯を食べ終わったあおいはリビングにいた

スーツの上着はソファの背もたれに掛けローテーブルに置いてあったバッグから

ノートパソコンを取出し起動させソファによりかかるようにフロアリングへ直接座り

黙々と文章を打ち込んでいる

フローリングに直接座れる日が来るなんて最近の生活では考えられない

なかなか快適だ

「水城さん」

ユウはキッチンからあおいに呼びかけた

あおいは打ち込むことに集中していて聞こえなかったらしく返事になかった

ユウは首を傾げるとダイニングとリビングの間辺りまで移動しもう一度名前を呼んだ

「水城さん!」

「は、はい!」

今度は聞こえたようであおいは驚き飛び上がった
その様子ユウは思わず笑ってしまった

「食後はコーヒーで良いですか?」

「え?ええ、おねがいします」

この家に住んでから家の中で誰かに呼ばれることが皆無だったせいで呼ばれる事に慣れないあおいは
にっこり「はい」とうなずきキッチンへ戻るユウを厄介な思いで見送った

気を抜くと

”なぜ雇うと言ってしまったのだろう…”

そればかりが頭の中をぐるぐるしているのだ

泡の付いたスポンジを持ち洗い物を再開し始めたユウを確認し
入力途中のノートパソコンへ視線を戻した

しばらくノートパソコンへ向かっていたが「あれ？」と先ほどのやり取りに違和感を感じキーボードを打っていた手を止めた

何気ない会話だったから聞き逃してしまっただが何かがおかしい
なんだろう…と首をかしげ、そして思い至った

(…: そうだわ！名前！！)

なぜか彼はあおいの苗字を知っているのだ

今朝、あおいは彼の名前は問うたのに自分は名乗っていない気がする

(あれ？知っているのだから名乗ったの・・・よね？)

昨日からありえないことが起きてかなりテンパっていたのだろう
バタバタしたこともあり記憶がぶっ飛んでしまっている
でも彼はあおいの苗字を知っている訳だし

(ここは聞き流してうやむやに…)

しかし、思い至ってしまったら言ったかどうかの不確かやら焦りやらでそわそわしてきた

あおいは耐えられず立ち上がりキッチン横まで行くとユウに話しか

けていた

「ねえ」

「はい」

「…とても失礼な事を聞くけれど、私：ちゃんとあなたに名乗ったかしら？」

なんて不躰な質問なのだろう

あおいは自分を情けなく、そして恥ずかしく思い顔が熱くなるのを感じた

確かに知っていることを聞き流したままうやむやにしておくこともままある

社会に出ればそんなことばかりだ

しかし一度気づいてしまふと納得するか割り切れるまで気になって仕方がない

恥ずかしすぎて睨むような目をしたままあおいはユウに問うた

洗い物の途中の手を止めてあおいを見たユウは

赤い顔でその上、上目使いに睨んで聞いてくるあおいを愛らしくもおかしく思ったが

それを表に出さず首を横へ振った

「いいえ、”水城”（みずき）さんですよね、表札で見ました」

そうにつきり答える

（やっぱり名乗ってかったのね…）

あおいはがっかりした

そして、そうか表札を見て確認取ったのか、と疑問も解けてスッキリもした

が、やっぱり情けない

「そ、そう、ちゃんと名乗りもしないでごめんなさい」

ここはやはり大人としてきつちり名乗るべき、と気を取り直して姿勢を正し

「水城 あおいです」

と、その場でペコリと頭を下げた

「 あおい ” さんですね、よろしくお願いします」

ユウもきつちりと頭を下げる

改まってそんなやり取りをしたあおいはこの場にいることがとてもいたたまれない気持ちになった

「ええ、よろしく…」

そそくさと返事をする素早くリビングへ戻っていった

それを見てユウは苦笑いを浮かべ後片付けを再開した

しばらくはキッチンでの洗い物をする音と、PCのキーボードの力

チャカチャという叩く音だけが響いていた

そしてあおいは眉間にしわを寄せながら唸った

(気まずい…当たり前だけど…)

そしてこの家で自分以外の音がするってとんでも違和感があるわ…
雇うのだから慣れなければいけないのよね)

「慣れる慣れる…」

パソコンに向かいながら呪文のようにぶちぶちとつぶやく

(と、それはともかくとして、これをプリントアウトしなくちゃー！)

現実には舞い戻ったかのようにあおいはハッとしノートパソコンから顔を上げてプリンタを求めて

今朝までの面影はまったくないきれいなリビングを見渡した

(あれ、プリンタどこかしら？)

確か床にプリント用紙の束と一緒に置いてあったはず…)

あおいが最後に見たプリンタが置いてあった場所はリビングの窓辺近くの床だ

部屋をあまり片付けない上、半数ほどゴミに埋もれていた部屋だったが

あお的に使い勝手の良いように物を配置していた

ソファから使う頻度順に床に置かれていた物の数々

ソファから遠ざかって置かれた物はそれだけ使われていないという

証拠でもあり

ただ単に散らかっていた訳でも放り投げて置いていた訳ではなくそれなりのルールがあった

だが片付けられているのでその”ルール”も消滅している

(きれいすぎると逆にどこにあるのかわからないわね…)

あおいは殺風景とも言えるリビングをぐるりを見渡した

今あるのはあおいが背もたれにしているソファ、そしてローテーブル

あとは壁の出窓下に備え付けのオープン棚があるだけ
だがその棚にはプリンタは置いていない

奥行的にも入らないはずだ

立ち上がることはせず、はしたなくも体を右に左にと伸ばしてキョ
ロキョロと部屋を探すあおいに

食器の片付けをしていたユウは、なにしてるんだろっ？と怪訝そう
な顔をして見やった

「どうかしました？」

「うん、プリンタがね、どこかなーっと思って…」

なおもキョロキョロとリビングの周りを探すが見当たらない

ユウはあおいのその様子が小動物のように思えて思わず吹き出した
くなった

しかし、それも堪え濡れていた手をタオルで拭き

「あちらですよ」

ダイニングの隅のキャビネットを指差し教える

ユウのそんな様子にも気づかずあおいは指差された方を見た
確かにプリンタがキャビネットの上に乗っていた

「さすがに床に置いたままにしておく訳にもいかず置けるところを
探したらそこになりました」

あおいは「そう」ときこちない笑みを浮かべ立ち上がりキャビネッ
トまで移動した

「用紙は引き出しの一番上に入ってます」

洗い物を終えてコーヒークップを手にユウが先回りして言った
あおいはキャビネットの一番上の引き出しを開けた
ユウの言った通りプリント用紙が収まっている

そしてこっそりと小さくため息をついた

この家で暮らす前、実家ではお手伝いさんがいて自分の部屋を掃除してもらったことは日常的にあつたのだが

ここまでいろいろと動かされたことはなかった

まあ、この家の中は足の踏み場もなかったほど物が出っ放しだったしゴミの山だったし

だいたい物は移動させざるを得なかったとは思うのだが

帰った時も思ったが他人の家みたいだ

掃除された家でも物の配置を自分で行ったのならば置き方に自分のカラーが出る

しかし今回のように大々的に他人に配置を変えられているとそのカラーは薄れ

”自分だったらこの辺に置く”などの推測がしにくい

(落ち着いたら、もろもろの片付けた場所を聞かないとだめね)

あおいはその作業をさもうんざり思いながら引き出しの中からA4用紙を2枚取り出しプリンタの横へ置いた

「あれ？そっいえば、このプリンタ…最後にいつ使ったかしら？

あまり覚えていないわ…確か最後に使った時、半袖のカットソーを着ていた気がするけど…

と、いう事は夏？…？…いつの？」

プリンタをじーと見て口元に指を当ててブツブツ呟きながらうーんと悩む

夏らしいことは思い出したがどうもはつきりしない今年なのか去年

なのか…

インクが固まっているかもしれない不安感でプリンタに触るのが少し恐く思えてきた

そして”プリンタを起動させてみるしかない”という当たり前の結論に至り

いささかまごつきながらプリンタの電源コードをコンセントに差し込み起動させる

ウィーン

プリンタが正常に起動した

ここまでは大丈夫そうだ

そしてテストプリントをしようと液晶画面とにらめっこした

が、久しぶりに触るプリンタ

どこがどうなっているのかさっぱりわからない

そのため立てた人差し指が液晶画面の上をうろろする

「あーもう！こんな事なら会社と同じ記機種にすべきだったわ」

とりあえず押してみるが求めているものは出てこない

「そうだわ！説明書！あれを見ればわかるかもしれない」

苛立ったせいで無意識に声が大きくなっていたがああい本人は気づいていない

思い通りにならない状況にプリプリしながらプリント用紙の入っている引き出しを探った

しかし説明書はなかった

「どこにあったかしら？」

プリント用紙と一緒に置いてあった気もするが違う気もする
思い出せない、どうもあやふやだ

「高柳くん、これの説明書どこになかったかしら？」

引き出しから顔を上げてプリンタを指差しながらユウを見やると
彼はコーヒーマーカーのスイッチを押そうとしているところだった
あおいの声はすべて聞こえていたがユウはそ知らぬふりをして

「説明書ですか？」

と、コーヒーマーカーのスイッチを押しあおいの元へやってきた

「ここを掃除した時には見なかったのですが

プリンタなら俺見ますよ？」

そして「失礼します」とあおいに断りを入れプリンタの中を見たり
液晶ディスプレイをいじり始めた

「わかる…？」

あおいは作業している横からプリンタを覗き込んだ

「このメーカーのプリンタなら使ったことがあるので
…たぶんわかると思います」

プリンタのふたを開けインクを確認しつつユウは言う
それはよかった、と顔をユウの方へ向けたあおいだが
思いのほか近くにユウの横顔があり驚き横へ飛びのいた

「じゃ、じゃ、じゃあ、プリンタはお願いしようかしら」

かなり不自然な動きをしながらあおいはあたふたとPCに戻った
あおいは驚きでバクバクしている胸を押さえ作ったデータをメモリ
ースティックに保存し抜きとった

プリンタではユウが液晶を”ピッ””ピッ”と押して作業している
のであおいに背を向けている

(びっくりしたー)

メモリースティックはバッグに入れノートパソコンはディスクトッ
プ画面にする

プリンタをチェックするにもパソコンを使うことぐらいあおいにも
わかる

ダイニングテーブルの方がリビングのローテーブルよりプリンタに
近い

あおいはまだ少し踊っている心臓を宥めながらノートパソコンをダ
イニングテーブルへ移動させたのだった

続く

第8話「契約」

「こつちに置いた方が使い勝手が良いでしょ」

「ありがとうございます」

パソコンをダイニングテーブルにセットし終えたあおいはプリンタのふたを開けて

中をいじくっているユウへ声をかけた

ユウは置かれたパソコンを見るとニコツと笑みを浮かべお礼を言うがすぐまたプリンタへ顔を戻した

あおいはその作業を今度は離れて斜め後ろから見守った

プリンタを見ているユウの顔はさつきから笑顔を振りまいている彼とは違い真剣な顔をしている

時々垣間見える見える指先は黒くなっているようだ

(使えるのかしら…)

やきもきと手持無沙汰で待っていたらユウがこちらを振り返った

「使えるかどうか確認するのにまだ少しかかりますし

…そうですね、その間にお風呂に入ってきたらいかがですか？」

「え?!お、お風呂?!」

あおいは素っ頓狂な声を出した

ユウはキッチンカウンタへ移動し置いてあるボックスティッシュで手の汚れを拭き

ゴミ箱に捨てながら答える

「ええ、沸いてますよ」

ユウはにこやかに言うのと今度はパソコンを操作し始めた

あおいは”お風呂”の言葉に非常にうろたえた

実は家に帰ってきた時は部屋のきれいさに驚いて”着替える”という行為自体を忘れていたのだが

食事を食べ終えた後はユウを警戒して自室に戻ることは出来なかったしかし彼を雇うと決めたからにはユウが起きている間に自室で着替えもしなくてはいけないし

お風呂にも入らなくてはいけない

昨日みたいに寝こけていればまだ救いがあるように思えた

(なんとという試練なの…)

あおいはクラツとした

このマンションはリビング、ダイニング以外の各部屋には鍵がそれぞれ付いているし

そして、マスターベッドルームのあおいの寝室、バス、トイレには警報も付いている

何かがあったら鳴らせばすぐに警備会社の警備員がやってくるようになっている

何かあったら”そう”すればいい

だが”そう”なったら不愉快でしかない

しかし風呂に入らないという選択肢はないわけで…

(あーもー!!腹をくくると決めたのよ!!!)

あおいは手に力を込めリビングへ移動すると

ソファに掛けてあったスーツの上着とテーブルの横に置いていたバッグを持ち

キツとまるで仇を見るかのようにユウの後ろ姿を見据え

「入ってくるわ！行つてきます！！」

と、怒鳴るように挨拶をしドスドスと足を鳴らしながらリビングダイニングを後にした

ボタン！！とドアの閉まる音を聞きユウは振り返り苦笑いした

自室へ戻りあおいは着ていたスーツの上着をベッドに投げバッグは鏡台の椅子の上に置いた

チェストの一番下の引き出しの中から部屋着を、その上の引き出しから替えの下着を

引っ張り出した

チェスト内は触ることを許さなかったためごちゃごちゃのままだちゃんと言った通り線引きをしている

「部屋はきれいになつてるし、触るなつてところは触らない

ハウスキーパーとしてはまずまずね」

あおいはスーツのスカートも先ほど放り投げたスーツの上着の上に重ねるように置く

部屋着に着替えながら満足げにきれいになった部屋を見渡した

そして投げ置かれたスーツを見るや眉間にしわを寄せた

着替え終えてクローゼットから出したハンガーを手に胡乱気にスーツを見つめたあおいは

ため息ひとつと共にガクツと首を下げた

「・・・やっぱりここはクローゼットに入れるべきよね」

正直面倒くさい

いつもならハンガーには掛けるがクローゼットに入れずに適当に壁に掛けて置くだけだ

何回か手を通したらどうせクリーニングに出してしまうのだし丁寧にクローゼットに

入れなくても良いのじゃないか?と思える

しかし、ここまできれいになっている部屋にスーツを出しっぱなしにして置くには違和感がある

あおいは渋々の体でクローゼットを開けると扉にかかっていたブラシでスーツにブラシ掛けをしクローゼットのハンガーパイプに吊るした

「ん?」

ハンガーパイプに引っ掛けた際、

ふとクローゼットの隅にバスタオルがかかっている何かが置いてある事に気が付いた

あまり使っていないクローゼットとは言えこんなものを置いた記憶はない

それにきれいになっていいる場所にとっても不釣り合いだと感じた

(何かしら?箱?私が置いたわけではないからきつと高柳くんよね?)

あおいはその箱らしきものをクローゼットから取り出し、そしてタオルを外した

中からはランドリーバスケットが出てきた

なぜランドリーバスケット?と首を傾げながら中を覗いてぎょっとした

入っていたのはあおいの下着一式だった

あおいはわたわたと下着を隠すようにタオルをかぶせ直した

(なんでこんなものがここに?!)

そして恐る恐るまたかぶせたタオルの中を覗き込んだ

中にはあおいの着用した形跡のあるキャミソール、ショーツ、ブラジャー、それにストッキングも入っている

いったいこれら下着類はなんでランドリーボックスに入っているの？

そしてなぜこのランドリーバスケットはクローゼットに入っているの？

あおいは頭の中がパニックになった

(なんなの、これは!?)

一瞬にして先ほど考えた『不愉快』な事が思い浮かんだ

そしてそこで思考がストップした頭のままあおいは立ち上がり自室から飛び出すように走りだした

そしてユウのいるリビングダイニングへと飛び込んだ

ユウはバン!!というドアを開ける音と共に勢いよく入ってきたあおいにびっくりした

「高柳くん!!わ、わた、た、た!!……した……し……い……あ
……」

あおいは勢いそのまま問おうとした
しただが

よくよく考えたらとても恥ずかしいことを聞こうとしていることに
気付き

言葉にならず真っ赤な顔のままうるたえたあげく言葉は尻すぼみに

なっつて消えた

(き…聞けない…なんと聞けばいいの??)

「わたた？したし??」

ユウはあおいの狼狽ぶりに作業を中断してパソコンのポインティングに指を置いたまま

あおいの言った言葉を復唱し首をかしげた

しかしあおいは言葉を出すことが出来ない

ユウは「わたた…したし…」とぶつぶつ言いながらまだ赤い顔のあおいを

上から下までゆっくりと2往復凝視した

そして、しばらくあおいの顔をじーっと見つめた後

「そついう事ですか!」

と納得顔でまたパソコンへ視線を移しそのまま話し始めた

「今朝、掃除していた際に洗濯機の置き場で見つけたんです

ランドリーバスケットの中に水城さんの」

「!?!、わーーーー!?!」

あおいはギョツとし感情のまま叫んだ

ユウはその大きな叫び声に驚いてあおいの方へ振り返る

(このダルマ男は何を平気な顔で言うのよ!?!)

あおいは真っ赤な顔のまま慌てふためいて手を上下に振り回すと

いう

挙動不審な行動を取ってしまった

そんなあおいの状態を見てユウはやっと彼女にとってとても大事おおいだったらしい事に気が付いた

「…えーとさすがにアレを俺が洗うわけにはいかないと思いまし

」

「アー!!”アレ”!?!」

”アレ”と指示しているものは言わずもがなランドリーバスケットの中身で…

「み、み、み、見たの!?!」

パニックっているあおいは焦った大きな声で問う

「え?いえいえ!!チラツとしか…でもすぐそのままの状態でバスケットにタオルを掛けて…

そのままそこに置いておくのもどうかと思ったのでクローゼットに置いたんです」

手を体の前でぶんぶん振りながら「俺は無実です!!」とユウは主張した

あおいは力を失ったように半泣きでその場に座り込んだ

(チラツとでも見たんじゃない…)

「だ、大丈夫ですか?」

ユウが心配そうに声をかけてくるが今度はさっきとは違う理由で返事が出来ない

ああいは座り込んだ瞬間にこんなことになった原因をやつと思いで出したのだ

今朝、寝室を掃除するというので洗濯乾燥後の衣類の山から下着類だけは急いでキャストに突っ込んだ

しかし昨日着けていた下着類はユウの濡れた服を洗濯し乾燥し終わった後で洗おうと

昨晚そのままランドリーバスケットに入れっぱなしにしていたのだ

（私のばかり！！！！）

情けないやら恥ずかしいやらとてもじゃないが顔があげられない
ああいは”穴があつたら入りたい”と生まれて初めて本気で思った

”ガガガガ…ウー…ガ・ガ・ガ・ガ…ウー…”

座り込んでいるあおいの目の前に一枚のプリント用紙がペラリと落ちてきた

そしてユウは落ちたプリント用紙を拾った

「あ、テストプリント終わりました。

良かったですね、プリンタ大丈夫そうですね？」

ユウはコーヒーをカップに注ぎながらダイニングテーブルにぐったり頭を下げて座っているあおいへチラリと目を向けた
どうやらダメージが過ぎたようだ

ここで何か言ったとしても逆効果無きがする

ユウは何も言わずただコーヒーカップとミルクポットとシュガーポットに乗せたトレーをテーブルへ運ぶことにした

「…ごっご」

芳ばしい香りのコーヒーがあおいの前へ置かれた

あおいはその香りに勇気付けられるように頭を上げた

「…ありがとう」

とてつもない疲労感を感じながらあおいはユウからコーヒーを受け取った

先ほどプリンタが正常に機能することが分かったあおいは羞恥と情けなさで

かなりの精神的ダメージを受けたが

なんとか立ち上がり自室に戻りバッグを持ってくると

メモリースティックをパソコンに繋いで2枚ほど文書をプリントアウトした

その用紙のうち1枚を向かいの席に座ったユウへ手渡す

あおいは気を取り直すように一口コーヒーを飲み自らを落ち着けてから口を開いた

「高柳君をハウスキーパーとして雇うにあたって契約書を作ったの」

紙の一番上にはでかでかと”雇用契約書”と書いてある

「まあ、雇うんだから約束事をきちんと決めないとね」

ユウは契約書を最初から順番に目を通した

”水城あおいを甲とし高柳ユウを乙として、甲乙は以下のとおり、

雇用契約を締結する”と書いてある

「すごい、本格的ですね」

「そんな事ないわよ、簡易的だもの」

内容は雇用契約のひな形を使ったただけだ
そこに少々付け足しただけの契約書である

「いろいろ調べてみたけど住み込みで個人との契約だから、だいた
いこの金額が
相場みたい

だからお給料はこの金額でいいかしら？」

「そ！そんな！お金なんて要らないです！！

置いてもらえるだけでありがたいです！！」

高柳ユウは手をブンブン振った

「そういう訳にもいかないわ

ハウスキーパーとして雇うって話に私は乗ったのだし…

私もそこまで稼ぎがある訳ではないからこれ以上出せないけど大
丈夫かしら？

不満があつたら言つて」

「いえ・・・、不満なんてまったくくないです」

ユウは恐縮そうな顔をした

あおいはそれを黙殺した

これは契約だから情を挟んではいけない。あくまでビジネス。

「そう、それなら良かった

あの客間は好きに使っていいわ

だけど、そこにも書いてあるけど寝室には掃除以外には近寄らないでね」

ユウはあおいの言葉をひとつひとつ聞きながら内容を確認していた

「すみません、いくつか俺のほうから質問していいですか？」

「なに？」

「お料理を作るに当たって好き嫌いとか聞いておきたいんですが・
・それと……」

その後ユウとあおいは固定電話の横に置かれたペン立てからボールペンを

持つてくると雇用契約・共同生活のための約束事を確認しては2人して

用紙に書き込むという、なんとも会議のような時間を過ごした

「最後に”契約解除は甲乙お互いの同意があれば解除できる”

これでいいかしら？ さあ、あとはここに拇印を……と」

「はい」

2枚の紙を並べてあおいは持ち歩いている印鑑を

ユウは親指に朱肉を付けて割り印をした

「はあ、これで終わり！」

あおいは首をほぐしながら言った

「今日はもうお風呂入って寝るわ！後は追々やりましょう。おやす

み!！」

さすがに2時を回って疲れた

あおいは契約書の1枚を持って立ち上がった

昨晩はソファで転寝のように寝てしまっていたから疲れが全く取れていない

もうユウの事など気にしていられないほどの眠気を感じながら

おぎなりの挨拶でダイニングを出た

「はい、おやすみなさい」

ダイニングのドアが閉まる前、ドア向こうからティシューで朱肉をふき取っていた

ユウの挨拶が聞こえた

「おやすみなさい」…か。なんかいいかも・・・」

ドアが閉まって廊下を歩きながら眠気で目を開いていられないほどでフラフラだったが

フフフ…と笑いながらあおいは自室から着替えを取ってどうにかお風呂に入った

そしてとてもきれいになった湯船に身体を沈めうっとり物思いにふけた

(こんなきれいになったお風呂で本を読んだらとても気持ち良さそう…)

眠い頭であおいはお風呂で読むに適した本を自分の書庫からピックアップアップしていく

あおいはそこでハッと思い至った

さつきはとても気負いながらお風呂に入ろうとしていたのに今はずんなりと

お風呂に浸かっている

急に現実に戻り眠気が少し遠のいた気がした

そして慌ててイソイソとお風呂を出た

髪を乾かし、バスルームから廊下を覗きユウがそこにいない事を確認すると急いで自室へ戻る

ガチャリと鍵を掛けるのも忘れなかった

「ふう」

無事お風呂に入れた事と自室へ着いた安心感とで一気に睡魔と虚脱感が押し寄せる

あおいはベッドに腰掛けて横にコロんと転がった

「こんなきれいに掃除されているベッドで寝るのはどのぐらいぶりかしら…」

あおいは掛布の上からベッドをなでた

清々しい空気の部屋、洗い清められたカバー

家中がどこもかしこも見違えるほどきれいになっていて何度見ても自分の家ではないようだ

でもこんなきれいな状態で暮らせるのはとても魅力的で

(ご飯もおいしいし…)

それはありがたいのだが、ホントにとんでもないことになった

ダルマ男を拾った、そしてハウスキーパーとして雇った…自分のまいた種だが

自分と変わらない歳の男性と共同生活をするなんてどうかしている

としか思えない

1日で自分の置かれている世界が変わった

そしてあの家の事もある

ばれたらあの家族はどのように出るか…

考えるだけで面倒くさい

だがもう契約もしたのだ

” おかえりなさい ”

” おやすみなさい ”

どれぐらいぶりに聞いた言葉だろう

もう長いこと一人暮らしをしていたし

実家ではあまり家族と関わることをなかつた

人とあまり関わらない生活を望んだのは自分だ。

だが、なぜだろう

一人であることを望んだのは自分自身なのに

あの出迎えてくれた時の ” おかえりなさい ” の笑顔が胸から離れない

” おやすみなさい ” の声をとても心地よく思った

「 変なの… 」

うつらうつらと自分を笑いながらあおいは掛布を自分に巻きつける

ように引っ張り

いつの間にか眠りについていたのであった

続く

第9話「今日の1冊と素敵な朝食」（前書き）

小説に出てくる登場人物も建物・会社もすべて作者の想像です。ご容赦お願いいたします

第9話「今日の1冊と素敵な朝食」

あれはいつの記憶だっただろう

蝉の声が聞こえていた…

そう、夏休みだった気がする

『あなたは”妖精さん”ね!!』

そんな言葉が聞こえてくる

私の声だ

まだ小学生だろうか？

あの頃は家族といることが苦痛だったため家の中に居たくなくてよく庭に出ていた

そして本を片手に涼しい場所を求めて庭の日陰をよくウロウロさまよっていた

庭の西の塀のそばに生えていたとても茂った大きな木

ちょうどその木の下を通りかかった時、上から葉が落ちてきたのだ

木の下から見上げると、上の太い枝に少女が座っていた

逆光のせいだろうか？顔がよく見えない…

私は少女と時々その木の太い枝で本を読んで過ごした

彼女がひっぱり上げてくれた木の枝から見る実家の庭も街も

今まで見ていたモノとは違って見えて心がワクワクした

そして、そんな私の様子を見てニコニコ笑う彼女の口元の優しかった誰かに見咎められると嫌だったから少しの時間しか一緒にいれなかったけど

とても安らげる幸せな時間だった

なぜ”妖精さん”と呼んでいたのだろう

とても透き通った肌と茶色い肩にかからないぐらいのサラサラのきれいな髪が

光を受けてキラキラしていて絵本に出てくる妖精のように思えたのか…
それとも昔に亡くなった母によく似た雰囲気がこの世のモノと思えなくて

そう思おうとしたのか…

彼女は誰だろう

今はもう思い出せない

思い出はシフォンのベールの向こう側を見ているかのように曖昧で
掴めなくて

とてももどかしい

ただ確かなことは私は夏休み”妖精さん”と束の間だけ一緒に遊んだのだ

ビビビビビビビビビビ!!!

朝からけたたましい目覚ましの音が部屋の中で鳴り響く

「!!!!!!」

あおいは聞きなれない目覚まし音に一気に飛び起きた

あおいは昨日、眠いながらも携帯のアラームをセットしていたらしい
だがどこでセットしてどこに置いたのか思い出せなかった

布団の中で迷子になった携帯を見つけるのは寝ぼけた頭には至難の
業だ

そして音のなる大元の携帯をベッドの中からどうにか探し当てると
ベッドの上で座ってアラームを切った

知らず知らずに息を止めていたらしく胸の中に溜まっていた空気を

一気に出す

「そっかあ、これ代替え機だからアラーム音違うんだ…」

携帯を片手で握りしめながらベッドに『ばふっ』と突っ伏した
心臓がドツドツドツと踊っている

しばらくそのままの格好でいたあおいだが、ガバツと頭を上げた

「あれ？ここどこ？？」

高柳ユウと契約を交わした次の日の朝である

きれい過ぎる部屋に一瞬ここがどこだかわからなかった
頭を上げたあおいは開かない目を懸命に開けようとし

そしてどうにか自分の部屋だと認識するとまたベッドに突っ伏し、
そして転がった

落ち着いてきた心臓と、心地よいベッドときれいな空間
あと……なんだろう、何かを忘れている気がする……

(まあ、いいや。大したことではないのだろうし……)

あおいはまたウトウトとしていた

布団がとても気持ち良い

先ほどの夢の続きが見れそうな、そんな気がした

(……どんな夢だったかしら……?)

どうにかして先ほどの夢の切れ端を掴もうと微睡みを続けていたあ
おいだったが

「…ダメだわ…、このままだと絶対二度寝してしまう…」

まだぼーっとして夢の中に行こうとしている頭を叱咤してどうにか起き上がり

フラフラしながら素足でペタペタと部屋の入り口まで移動する
そしてドア横の化粧台に置かれた写真に半分目が閉じたままに
にへらと笑みを浮かべ話しかけた

「おはよう、おかあさん……」

その写真にはあおいとよく似た顔で柔らかく笑う女性が一人写っていた
そしていつものように寝間着の格好のままであくびをしながら部屋を出た

「あ！水城さん、おはようございます！！」

廊下とリビングダイニングの間のドアが開いている

赤いエプロンをつけたユウがパタパタと忙しそうに動いていたが
おいに気づき

ドア枠の向こうからにっこり顔だけ出して挨拶してきた

「お……、おはよ。……………っ！！！！」

あおいあくびの際に口に当てていた手をそのままに挨拶をし、バチ
ッと一気に目を覚まし昨日の事を思い出した

（そうだった！！）

今、この家には私だけじゃなかったんだ

(いけない！着替えないと！！)

あおいは大あわてでUターンをして身支度をしに部屋へ戻った
そしてベッドの足元に忘れた昨日脱いだスリッパに足を入れ
もう一度ドアを開け、ユウがないのを確認すると洗面所までダッ
シュした

そして洗顔を済ましコソコソと自室へ戻ると母の写真の置かれている
磨きこまれた鏡の化粧台でメイクを施す
じーっと鏡に映った自分を凝視すると眉間にしわが寄った顔が映っ
ている

拾った当日といいすっぴんをこつも他人に見せるのは如何なものな
のか？

昨日から眉間にしわを寄せていることが多い気がして
眉間のしわを指で伸ばすようにすると立ち上がり着替えをしてから
会社に行ける用意をしてあおいは一つ息をつき気合を入れて部屋を
出た

(昨日はあんな状態だったから本を読む時間はなかったけど今日は
読めそうね)

身支度を整え気持ちを落ち着かせたあおいはスキップをしそうな足
取りで

昨日きれいになっていたのを確認した書庫へと移動する

あおいが書庫に使っている部屋は北西の8畳の部屋だ
部屋を上から見て東南の角にドアがあり西の壁の真ん中あたりに腰
の高さの窓がある

本棚は窓とドアそして収納以外の壁に天井まで高さのあるものをL
字型を1本と

ドア、クローゼットを避けるように壁合わせて配置したI字型が2
本置かれていて

窓の下にも寸法を合わせて本棚を置いてもらった

そして部屋の真ん中にお気に入りのアンティークの丸テーブルとそれに合わせた椅子とスタンドが置かれている

図書館の読書席をおしゃれにしたような感じだろうか

窓はUV加工にして本の劣化を防ぐために薄いカーテンが引かれていた

入居する際にこの部屋は手を加えたのだ

そうしないと絶対底が抜けるし、地震が来た時に本棚が倒れて下敷きになると

当時、不動産屋に脅された

あおいはいつもなら本棚に並んでいる中はもちろんだが、そここに重ね置いてタワーのように重なった本の中から”今日の1冊”を探すが

しかし今日はユウのおかげでチリひとつなくズラリと並んだ本棚の中から選べる

なかなかのギユウギユウさだ。さすがに本棚を足さないと入りきらなくなりそうだ。

それはさておき

「……………」

あおいは、おや？と首を傾げながら北側の本棚を見て、まわりの本棚も一緒にぐるっと見渡した

そしてもともと見ていた北側の本棚に顔を戻して見つめたまま今立っている位置から2歩ほど下がった

あおいの集めている本は経済学や心理学、哲学、いろんな種類の小説、童話、絵本、画集、写真集など…日本の本から洋書まで雑多にある

「これって…”あいうえお順”よね？」

並んでる本の作者を順に追っていく

洋書も画集も写真集も含めて見事にすべて無差別に作者の”あいうえお順”に並んでいる

本の高さなんか丸無視である

「高柳くん、英語読めるのかしら？洋書も一緒に見事に”あいうえお順”だわ」

徹底していてすごいと思うが少し呆れてしまう

「…せめてジャンル別で分けたいわね」

あおいは「後で高柳くんに言おう」と、つぶやきながら

本棚から”今日の1冊”を選び自室にバッグと上着を取りに行くと再度リビングダイニングへと足を踏み入れた

「あおいさん、朝食の用意出来てますよ

新聞はリビングのテーブルです」

赤いエプロンをしてテキパキとキッチンで動いているユウ

朝から元気だな…なんて思いつつ、あおいはダイニングテーブルの朝食を見た。

焼鮭に大根のお味噌汁にご飯、切干大根の煮びたしにキュウリのお漬物とお海苔

（素敵！！なんて見事な朝食なの！！）

テーブルの朝食はあおいの目にはピカーツと光り輝いて見える

いつもならまず唯一の座れる場所であるソファでコーヒー片手に新

聞を読み

朝食と言えば途中でサンドイッチを買って会社の休憩室で食べていたあおいだが

目の前にはそんな日常からは考え付かない素敵な朝食がセットされている

あおいは心が弾むのが抑えられずイソイソとダイニングチェアに座った

そして、座ってからそんな自分の行動に気づき遅まきながらすまし顔を作った

「今、お茶お持ちしますから待っていてくださいね」

すまし顔を作っているが明らかにそわそわと待っているあおいの姿に嬉しそうに笑みを浮かべたユウは急いで湯呑を2つ盆に乗せやってきた

「……………いただきます」

「はい。いただきます」

自分用の湯呑がテーブルの上に置かれユウが席に座って落ち着くのをまだかまだかと待っていたあおいは

ユウが席に着くのを確認するとすぐさま食事のあいさつをしたそしてユウはそれに続いてあいさつをし二人は食事を開始した

『「ご飯は出来るだけ一緒に食べる」ってどうですか?」

『何よ、それは』

『いえ…………、ちょっと試してみただけです、すみません』

昨日の契約書を確認して約束事や決まりを確認していた最中にユウがいきなり言ってきた言葉だ

言われた時は「はあ？何言ってるの？？」と呆れたが

よくよく考えれば一緒に食べない場合、

私が食べている間はキッチンのところで立って給仕をするつもりなのだろう

実家ではそんな光景よくあったなあ…と思った。

昨晩の夕飯時もそのつもりでキッチンで立っていたのだろうか

別にそれでもかまわないのだが・・・

ただ、雇うと契約を交わしたとは言え

どこまで”きっちり”としたハウスキーパーをこのダルマ男に求めるのか

そして彼は出来るのか？

実家にいたプロのお手伝いさんと比べてまるで粗探しのように生活するのは嫌だ

昨日の夕飯と一緒に食べてみて別に不愉快な感じはなかったのだしそれになんとなく”誰かと一緒に食事をする事をしてみてもいいかな？”とも思えたのだ

だからあおいは気軽に答えた

『別に良いわよ？』

そんな出来事があったのであおいの前にユウも座り一緒にご飯を食べている

あおいはご飯を食べながら行儀が悪いと思いつつユウを観察した

ユウの食事の作法は良いと思われた

所作もきれいだ

昨日は気持ちもまだ落ち着いてなかったからちゃんと見てなかったけど

なかなか見れる顔をしているようね…

と、ジロジロ見過ぎたのだろうか

ユウがチラリとこちらを見たため、バツチリ目が合ってしまった

「…、どうかしました？」

「いいえ！なんでもないわ！！！」

あおいはあわてて料理に目を向けた

いい歳をして覗き見していた事にも、そしてそれがばれた事にも恥ずかしく顔が急激に赤くなる

「お、お料理おいしいわ！」

何とも言えぬ焦りを覚え急いで取り繕うようにあおいはそんなことを言った

焦り過ぎて声が多少裏返った

「ありがとうございます。お口に合ってうれしいです」

ユウはさらりと流しゆったりとニッコリ笑った

あおいはその笑顔に後ろめたさと気まずさを感じ顔をひきつらせながら目の前の美味しい朝食に集中したのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7411y/>

拾い者しました

2011年12月25日00時54分発行